



TITLE:

ヤスパースの「実存」 —主観主義
を超越する実存哲学—(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

松野, さやか

CITATION:

松野, さやか. ヤスパースの「実存」 —主観主義を超越する実存哲学—. 京都大学, 2015, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2015-09-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19328>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2016-07-01に公開; 許諾条件により要旨は2015-12-01に公開

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	松野 さやか
論文題目	ヤスパースの「実存」——主観主義を超克する実存哲学——		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、カール・ヤスパースの思想の中心概念である「実存」を、意識、限界状況、包越者存在論、了解、交わりという五つの観点から解明し、それを通してその思想がいかなる意味で「主観主義」の超克をなしえているかを明らかにしようとするものである。</p> <p>第1章「意識の主観と客観への分裂」では、ヤスパースがあらゆる主観・客観関係のもとにある根本現象とみた「主観—客観—分裂」、すなわち意識が主観と客観へ分裂しながら現象するというものの意味を考察する。自我意識と対象意識は相補的であり、これら両者が個人の心的生を形成するとともに、その在り方が個人の人格に反映する。ヤスパースの実存哲学は個人の主観的体験に重きを置くが、かかる自我意識と対象意識の相補性に対する彼の視点からして、それは客観と隔絶した主観性を追求する「悪しき主観主義」ではない。</p> <p>第2章「限界状況と実存」では、ヤスパースの「限界状況」論を論じる。ヤスパースの「実存」は「限界状況」における「選択」と「決断」によって生成するが、「選択」も「決断」も、単なる主観的な内的行為ではなく、理念や責任を意識してなされる主体的な創造行為である。この「限界状況」論に現れる「殻」という術語に集約されるヤスパースの思想を、ルカーチやリッカートは「主観主義」と呼んでこれを批判したが、「殻」理論の主意は、合理的なものを否定することにあるのではなく、合理的なものとは非合理的なものの相互作用を現実即して重視することにある。それゆえ、ヤスパースの思想は、リッカートやルカーチが評したような主観主義ではない。</p> <p>第3章「包越者存在論と主観主義」では、西田幾多郎が「包越者」について示した見解を出発点として、包越者と人間の主観について考察する。ヤスパースは、従来の「存在論」との違いを意識して自らの独自の存在論を「包越者存在論」と名づけるが、この包越者存在論の見地に立てば、個人は世界の中で三つの様態のつながりをもって生きていることがわかる。第一に、個人は一個の生命体として生き延びていくため、衣食住の確保・充実を図り、生命維持に役立つ情報を他の人々と交換する（現存在の観点）。第二に、個人は、世界や人間の普遍的な原理・原則を探究し、一定の客観性を備えた体系的知識を形成する（悟性の観点）。第三に、個人は、全体性の理念をイメージしながら、創造的なものを生み出す（精神の観点）。これらの三重のつながりを自分の中に取り込み、それらを「理性」によって総合しながら生きることではじめて個人は「実存」を現実化し「包越者」へ向かって超越することができる。この意味においても、意識作用の主体としての自我は、「我思う」だけで成り立っているのではなく、主観と客観の重層的なつながりによって支えられている。</p> <p>第4章「了解と実存」では、ヤスパースの思想の中心概念である「了解」に焦点を当て、「了解」という方法によってはじめて明らかになる主観的体験の性格と、「了解不可能なもの」としての「実存」の特性を際立たせる。ヤスパースは自らの提唱する「主観的心理学」の方法として、個々の心的現象の性質や状態を把握する「静的了解」と、</p>			

個々の心的現象間の連関を捉える「発生的了解」を用いて、「心的現実」を捉えようとする。こうした心的現実とは、それを言語化すると、物語となる。人間の心には、そうした主観的「了解」によってしか到達できない領域があり、それは観察者と被観察者とを明確に区別する近代科学の方法が適用不可能な領域である。だが、こうした「了解」の方法ですら捉えられない、人間の主観の問題がある。そこでは「交わり」という関係性が要請される。それは、互いの可能的でありまた可能であるべき自己存在、すなわち「実存」を呼び覚まし合うようなコミュニケーションである。

第5章「交わりと実存」では、ヤスパースの実存哲学の要をなす「交わり」の思想について、「主観主義」という観点から再考する。ヤスパース思想の基底をなす主観を重視する学問的姿勢は、個人の恣意を増長させ、議論やコミュニケーションの意義を軽視するといった、実践倫理を欠く個人主義的・相対主義的なものではない。それにはむしろ、優れた実践性・倫理性が備わっている。「交わり」には、「現存在の交わり」と「実存的交わり」の二つの様態があるが、どちらにおいても、闘いとしての限界状況が当事者によって経験されるという原理が認められる。この点からしても、ヤスパースの実存哲学は「主観主義」ではなく、実践的・倫理的性格を備えている。

これらの考察から、ヤスパースの思想の根底にある基本的な考え方は、われわれの主観に無限の発展可能性と倫理性とを見出し、個人の本来的自己存在が生み出されるようなコミュニケーションの在り方を追求するものであることが明らかになる。ヤスパースの哲学の中核をなす「交わり」の思想は、「主観主義」ではなく、「現存在の交わり」においても「実存的交わり」においても当事者の克己や愛が要請されるという点で、実践的・倫理的性格を持つ思想である。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、カール・ヤスパースの思想の中心概念である「実存」を、意識、限界状況、包越者存在論、了解、交わりという五つの観点から解明し、それを通してその思想がいかなる意味で「主観主義」の超克をなしえているかを明らかにしようとするものである。

第1章「意識の主観と客観への分裂」では、「主観—客観—分裂」という意識の根本現象を基底として、自我意識と対象意識がいかなる意味で相補的であるか、また自我意識がいかなる「発展段階の系列」を持つかについて丁寧な考察を進め、その結果、ヤスパースの実存哲学が個人の主観的体験に重きを置きつつも、客観と隔絶した主観性を追求する「悪しき主観主義」ではないことを示した。

第2章「限界状況と実存」では、ヤスパースの「限界状況」論が取り上げられる。この「限界状況」論に現れる「殻」という術語に集約されるヤスパースの思想を、ルカーチやリッカートは「主観主義」と呼んでこれを批判したが、学位申請者は「限界状況」論の周到な検討を通して彼らの批判がどのような意味でヤスパースの思想の曲解に基づいているかを明らかにしようと試み、その試みを通して「限界状況」論の積極的な意義を明示する。

第3章では、西田幾多郎が「包越者」について示した見解を出発点として、包越者と人間の主観について考察する。ヤスパースの実存哲学もまた「主観から客観へ」の超越であって近世の主観主義を脱していないとする西田に対して、学位申請者は西田が「超越するはたらき」の出発点とみなしたヤスパースの「主観」は夥しい主観—客観関係を背負った「主観」であり、「非我」がなければ超越するはたらきとしての「自我」もないとし、「包越者」が西田の言う「場所」の「主観面」ではないことを明らかにしようとする。こうした考察を通して、ヤスパースの立場が、すべての存在者が包越者を媒介としてつながっているとするとするものであって、否定的な意味での個人主義ないし主観主義ではないということを明らかにした。

第4章では、ヤスパース思想の重要概念の一つである「了解」を取り上げ、その方法によって捉えられる主観的体験がどのような性格のものであるかを考察し、これと対比的に「了解不可能なもの」としての実存の特性を際立たせることによって、彼の主観重視の考え方の根底にあるものを明らかにしようとする。この考察は、ソクラテスを取り上げての物語論へと接続し、最後にそうした了解の持つ限界としての「了解不可能なもの」すなわち実存の再考へと至る。こうして、学位申請者は、ヤスパースが当時の優勢な「理論」に対して自らの主観的心理学の方法をいかなるものとして捉えていたかを、その方法に関わる多様な事柄を慎重に整理しながら解明することに努めている。

第5章「交わりと実存」では、ヤスパース思想に対する「主観主義」であるとの批判が再度前面に出される。当人の人格の不遜な重視、誤った個人主義であるとの批判に対して、学位申請者はもう一つの基軸概念である「交わり」を取り上げ、その理解の誤りを指摘しようとする。学位申請者は「交わり」の二様態、すなわち「現存在の交わり」と「実存的交わり」を順次取り上げ、その内実を確認し、それらに通底する

原理として、どちらにおいても闘いとしての限界状況が当事者によって経験されるという点を指摘し、ヤスパースの実存哲学が「主観主義」を標榜するものではなく、実践的・倫理的な性格を備えていることを可能な限り示そうとしている。

以上、学位申請者の考察は、実存をめぐるヤスパース思想の諸相を慎重に解明するよう努め、本論文においてその目的を十分に達成していると認められる。しかし、本論文がヤスパースの「実存」概念を「主観主義」批判を念頭に置きながら解明しようとするものであるにもかかわらず、その「主観主義」という概念自体が十分に整理された形で提示されてはおらず、例えば「はじめに」での言及、第2章でのルカーチとリッカートとの関係におけるその言及、第3章での西田との関係におけるその言及、あるいは第5章での「交わり」との関係におけるその言及において、その言葉の意味合いに揺らぎが認められ、ヤスパースを批判した人々の提起する問題に学位申請者が十全に答え切れているかとの疑問が残る。「主観主義」という基本概念の堅実な検討、その言葉の基盤となっている西洋の「主観」、「客観」概念の由来についての、単に先行研究に拠るのではない慎重な考察が、学位申請者の今後の課題の一つとして求められる。

かかる課題は残されているものの、本論文における学位申請者の研究水準に疑念の余地はなく、近年研究者の多くないこの分野においてこうした研究成果を残しえたことについては、十分に評価されるべきものと判断される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年6月25日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 平成27年12月1日以降